
勇者な俺とナユタさんと。

ひじき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者な俺とナユタさんと。

【Nコード】

N85050

【作者名】

ひじき

【あらすじ】

「お前は幸せか」そういつてあいつは、ナユタは俺の前に現れた。日常に飽きた俺を待っていたのはもう日常とは呼べない世界だった！？そんな俺とナユタさんのなんでもありな物語。

0 (前書き)

オリジナルです

楽しんでいただければいいです

朝起きて、昼はいろんなことをして、そして夜には寝るっていうどこにでもありそうな日常に俺は飽き、苛立ちを感じていたが別にその日常をどうこう変えようとは思わなかったわけで、多少、刺激があればいいな、とは思ったぐらいだった。でも、それは無理だと知っている。

なぜならこの日常、世界は平和すぎるほどに平和で、誰もが幸せだからだ。幸せってなんだって俺はたまに思うときがあるが答えは出していない。けど、誰もが幸せな世界なんだ。

ちなみに言おう。俺が幸せだと思えたことは一度もない。きっと俺の日常に刺激ができれば僕は幸せになれるのかもしれない。

このまま俺は平和な世界で退屈でしようがない日常で、幸せをわからないままに生活して死ぬだけだと思っていた。朝起きて、昼はいろんなことをして、たとえばゲームとかデートもいいね。：彼女はいい身だが。そして夜には寝るっていう日常をおくったまま終わると思ってた。

けど、それは違ったんだ。俺の前にあいつが現れたことによって。あいつ————————ナユタが現れたことによって。

暑い。実に暑いってもんだ。

暦ではもう秋のはず。それなのにガンガンに照りつけてくる太陽は夏とまったく変わらない。

今年は秋がないんだろうか、と疑いたくなる。今すぐ俺がメガホンをもって地球に「もう秋だろおおおがああッ!!」と叫んでやろうかと思ったがやめた。言ったところでどうにかなるわけじゃないとわかっていからである。

ともかくも俺は学校へ登校しなければいけないわけで、灼けるようなアスファルトの上を歩いている。

制服であるワイシャツのボタンを第3まで開け、鞆から下敷きをとりだしてあおいだ。風が生暖かい。

このままボタンを全部はずしてしまおうかとも思ったが、周りからの視線がこわかったからやめることにした。

そう、周りの視線がこわかつ……あれ。俺はボタンをすべてはずしていないのに、誰かにガン見されている気がした。

ついに、俺も暑さでやられちゃったか。

いや、気のせいじゃない。居たんだ、俺の横に、少し小柄な、少女が。そしてこう言ったんだ。

「お前は幸せか」

0 (後書き)

プロローグ、というか冒頭、
というかそんなかんじです
なので短めですね

ご感想、アドバイスもらえたら嬉しくて倒れます

「お前は幸せか」

そう言ってきたのはセーラー服を着て、髪の毛をツインテールと呼ぶには長さが足りないが二つに結んでいて、何故か上履きを履いていた少女だった。

いや、一見少女のような容姿、顔立ちだがたぶん自分と同じ年ぐらいじゃないだろうか。

少女は眉をつりあげ、腕をうしろに組んで立っている。

俺は少女に言ってやった。

「幸せじゃないよ。幸せなんて感じられないんだ」

「…ふん」

答えに満足したのか、少女はにっと笑って、俺の目の前に顔を近づけてきた。

生まれてこの方、ろくに異性との交流がなかったものだから、ここまで接近されたのも初めてであったために俺の心臓はバクバク音を

立っていた。

「ななな、なんだよ…っ」

「お前には今から我と共に来てもらおう」

顔が近いまま言われた。

――へっ!?

「共につて…、意味分かんない。俺は今から学校なの、行かなきゃいけないんですが」

暑さのせいもある。変な奴に出くわしてだんだんイライラしてきていた。

俺は少し強めの口調で言ってやった。それなのに、少女は耳をかさずに俺の言葉を見殺しにしていた。

「我の名はナユタ。アンダーグランド東部カズサから来た。今からお前にはアンダーグランドへ来てもらおう」

ナユタ? アンダーグランド? カズサ? 意味わかんない!!
俺は内心シャウトする。

「何言って…。アンダーグラウンド？カズサ？なんだよそれ！！」

「来ればわかることだ」

少女の小さな体からは想像もつかない力が腕にかかっている。俺は振り切ることができなかった。

そのまま少女に引っ張られ、俺は道の端の草の茂みのなかへ連行、そのさきにあったのは古びた井戸。

「ちょ、待っ…」

少女はそのまま古びた井戸の中へ飛び込んだ。俺の腕をつかんだまま。

落下。井戸の中は真っ暗。死んだって思った。

なんて俺の人生はダメダメでつまらない人生だったんだろう。最後まで幸せを知らないまま死んでいくなんて――――

……おい！

うるさいなあ。

……おい！

天国でくらい静かにさせてくれ。

……おい！

うるさい。

……おい！

誰だよ、まったく。

……おい！

「うるさああああい！！」

叫びと共に俺は意識を取り戻した。
生きてる。俺は生きていたんだ。…ということは、ここは何処だ。
俺はあたりを見回す。まったく見覚えのない場所であった。

「あ、あのう…」

後ろからの声。反射的に俺は振り返る。
後ろに居たのは、ドレスを着た可憐な少女だった。

「どこか、具合の悪いところとかありませんか？」

俺を気遣っているようだった。

「いや、ない……です」

自然と目をそらして、口ごもってしまう。可憐な少女は、にぱあつと可愛げな笑顔をうかべた。可愛い。めっちゃ可愛い。

「よかったですう。ナユタちゃん、勇者様が起きましたよ」

可憐な少女は安心した顔をうかべ、横を向いて誰かに話しかけた。

ナユタ：どこかで聞いたような言葉である。なんだっただろうか。

「起きたかつ！！」

頭の中の記憶を引きだそうとしている俺の耳に突然、大きな声が響いた。その声の主を見…思い出した。

「あ、あんたは！！あの時の

「ようこそ、アンダーグラウンドへ」

言い終わる前に俺の言葉はかき消された。

アンダーグラウンド：って、アンダーグラウンド！？この少女が言った
とおりの場所へ俺は連れてこられたってわけだ。
そんな俺をお構いなしに少女は自己紹介をはじめた。

「我はナユタだ！」

「わたしはファラといいますの」

空氣的に、俺も自己紹介をしなければいけないのだろうか。

「俺は、志乃^{しの}」

「そうか、シノか。」

セーラー服の少女——————ナユタさんは俺の名を呼び、
意味深長なことを言い出した。

「不幸な勇者、シノよ！お前はこれからアンダーグラウンドで我らと
共に旅をしてもらおう」

「ちょっと待ってくれ。何もかもが訳わかんないんだ、説明してく
れよ」

「わたしが説明しますの」

そう言ってドレスを着た可憐な少女――――――ファラちゃん
んが説明を始めてくれた。

俺が日常を過ごしている世界――――地上の下に存在する世界、それがアンダーグラウンド。

アンダーグラウンドには太陽がない。人工的に造られた『ヒナタ』が太陽の役割をはたしているようだ。地上との行き来は井戸でできるようだ。現に俺も井戸から来たわけだから。

「つまりは、ここは地上とは別の世界ってことか」

「その通りだ、不幸な勇者よ」

「あの…」

「何だ、不幸な勇者」

「さっきから、不幸な勇者、不幸な勇者って、なんなんだよ」

今、一番したかった質問はこれである。

不幸な勇者とは俺のことをいつているのであろう。そうではないと思いたいがきつとそうだ。不幸な勇者：なんて言われようだ。

「幸せを感じられない、これほどの不幸があるか！よってお前は不幸な勇者なのだ。我が今決めた」

なんという強引さ。たしかに、不幸なのかもしれないが、勇者とはなんなのだろうか。勇者とよばれるほどのこともしたことがないし、逆に勇者とはかけ離れた存在ではないだろうか。

それでもう一つ。俺がここに連れてこられた訳だ。訳をナユタさんにきいたら、

「地上にでて、はじめに会ったのがお前で、お前が幸せじゃなかったからだ」

と応えられた。

「幸せじゃないのって重要なのか？」

「重要だ。理由は聞くな。とりあえずなんとなくということでは理解しておけ」

「は、はあ…」

半ば強引に納得させられた俺である。

「さあ、ファラ、シノよ！これから旅のはじまりだっ！！」

これが、不幸な勇者こと俺とナユタさんとファラちゃんの出会いだ
った。

俺のつまらない退屈な日常が終わりを告げた。
ちよっぴり刺激のはいった新しい日常が始まったんだ。

1 (後書き)

どうでしょうか？

ご感想、アドバイスもらえると嬉しくて倒れます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8505o/>

勇者な俺とナユタさんと。

2010年11月15日16時23分発行